

氏 名 (本籍)	瀬 在 泉 (東京 都)
学 位 の 種 類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6249 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	大学生における喫煙行動と自己イメージスクリプトとの関連

主 査	筑波大学教授	保健学博士	宗 像 恒 次
副 査	筑波大学准教授	博士 (学術)	橋 本 佐由理
副 査	筑波大学准教授	博士 (医学)	森 田 展 彰
副 査	筑波大学助教	博士 (医学)	吉 野 聡

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

日本における喫煙対策は重要な健康政策であり、未成年者の喫煙防止や禁煙支援プログラムの普及などが柱となっている。喫煙行動において青年期は非常に重要な時期である。近年喫煙は薬物依存として捉えられてきているが、薬物依存の背後には、否定的な自己イメージスクリプトが根底にあり、心傷感情の存在が隠されているのではないかと指摘されている。禁煙などの保健行動には、自己イメージスクリプトが自己決定力を左右するが、否定的な自己イメージスクリプトが根底にある限り、行動変容に繋がることは難しい。先行研究の結果も、喫煙行動と否定的な自己イメージスクリプトや、行動を共にする友人や監視する親との関係性・情緒的な支援欲求との関連性を示唆している。更に、依存性物質使用は、物質そのものが持つ脳内及び行動機序による神経伝達物質の報酬系への関連、個体の持つ遺伝的な気質とも関連しており、それらも考慮した上で、喫煙行動の背後にある生物学的背景の関連性を検討する必要がある。

本研究は、青年期の中でも大学生における喫煙行動と自己イメージスクリプトなどとの関連を明らかにすることで、禁煙行動変容への示唆を得ることを目的としている。

(対象と方法)

本研究は、大学生の喫煙行動の特徴を心理社会的側面から明らかにすることを目的としているので、再現性・対象者数の確保・匿名性の確保などから、無記名自記式質問紙調査方法を集合調査にて行い統計的分析を行っている。研究課題はⅠ～Ⅲで構成している。

調査時期と対象者は以下の通りである。

- ①研究課題Ⅰ・Ⅱに関する調査実施は、2006 年 4 月 関東圏文系私立大学 3 年生 743 名(男子 353 名、390 名)。
- ②研究課題Ⅲについては、2009 年 4 月 関東圏文系私立大学 3 年生 940 名のうち、現在喫煙している者 164 名(男子 138 名、女子 26 名)。

(結果)

(1) 大学生における自己イメージスクリプトと本人の喫煙状況との関連 (研究課題Ⅰ)

ここでは、本人の喫煙状況と自己イメージスクリプト及び情緒的支援認知、主観的ストレス源認知、メン

タルヘルスとの関連性を量的分析により検討し、結果は次のとおりである。

①喫煙経験が有る群は喫煙経験が無い群に比べて、男子では自己イメージスクリプトとして自己憐憫、自己否定感を持つ自己を認知している傾向があり、主観的ストレス源認知や不安傾向も高かった。女子においては、自己憐憫を認知している傾向があり、主観的ストレス源認知も高かった。

②現在喫煙している群は現在喫煙していない群に比べて、男子で喫煙仲間から情緒的支援を高く認知している傾向であった。また、男女共に、希死念慮や罪悪感を持ちやすい可能性も示唆された。

一方女子では、喫煙年数が長いほど、家族からの情緒的な支援を高く認知していた。

(2) 大学生における自己イメージスクリプトと周囲の喫煙状況との関連 (研究課題Ⅱ)

ここでは、(1)の結果を踏まえ、更に周囲の喫煙状況と自己イメージスクリプト及び情緒的な支援認知、主観的ストレス源認知、メンタルヘルスとの関連性を量的分析により検討しており、得られた結果の概要は次の通りである。

①周囲の喫煙状況と関連が高い喫煙行動要因は、男子は「喫煙する友人が多く存在する」、「弟がいる場合、弟が喫煙している」と関連していた。女子は「喫煙する友人がいる」、「母親が喫煙している」と関連していた。

②共分散構造分析による仮説モデルの検証では、男子においては、否定的な自己イメージ認知は本人の喫煙や周囲の喫煙を考慮した喫煙状況を促進し、情緒的支援認知を促進し、メンタルヘルスの維持にも繋がっている可能性が示唆された。また、情緒的支援認知はストレス源認知を抑制しておらず、喫煙行動を通じた情緒的な支援認知は、かえってストレスを増幅している可能性が示唆された。女子においては、仮説モデルにあてはまらなかった。

(3) 大学生の喫煙者におけるストレス気質及び自己否定感と喫煙行動との関連 (研究課題Ⅲ)

ここでは、大学年代について現在喫煙している者のストレス気質、自己否定感、メンタルヘルスを量的分析により検討しており、得られた結果の概要は次の通りである。

①ストレス気質全てにおいて気質の発現認知が高い群が低い群に比べ、自己否定感が高かった。不安気質ではネガティブ精神健康度 GHQ12 も高かった。

②1日喫煙本数が11本以上群は10本以下群に比べ、新奇気質の発現認知が高い、身体的ニコチン依存度 (FTND) では、執着気質の発現認知の高群で FTND の得点が高い、禁煙の試みの有無では、不安気質・新奇気質の発現認知の高群で禁煙を試みる者の割合が高い。

(考察)

否定的な自己イメージスクリプトは、その根底に無力感やあきらめなどの感情を生じさせる。(1)は、喫煙を経験している、もしくは現在喫煙している者はそうでない者に比べ否定的な自己イメージスクリプトを持ちやすく、男女それぞれに特徴が認められた。そうであるならば、自分の健康や将来のためや幸せのために喫煙をしない行動を選択したり、禁煙行動を起こそうという自己決定は困難であるかもしれない。また(2)より、男女ともに友人や親の喫煙状況が、本人の喫煙状況に強い影響力を持っていた。男子では、喫煙する友人との関係性、女子では喫煙する両親、特に母親からの喫煙の連鎖や問題行動に対する規範的態度が関連している可能性が示唆された。男子では元々家族からの情緒的な支援を感じる力が落ちている中で、喫煙する仲間が情緒的な交流に重要な役割を担っている可能性があること、女子についても、喫煙する両親が子の不安を抑制している可能性があることから、喫煙の連鎖を断ち切ることは難しいことが予測された。

個体の持つストレス気質に応じたセルフケアも必要である。(3)より、喫煙する者はストレス気質を1つでも高く認知していることで、否定的な自己イメージスクリプトを特に認知しやすいことが示唆された。ストレス気質は元々悪性ストレスを認知しやすい神経伝達物質と受容体の関係がある上に、本来の行動特性を作り出している気質を十分に理解し活かしきれていないため、否定的な自己イメージスクリプトが強くなる

ものと考える。

(結論)

大学生の喫煙行動と自己イメージスクリプトとの関連性について、本人や周囲の喫煙行動と否定的な自己イメージスクリプトとの関連性が認められたが、男女による特徴がみられた。また、現在喫煙する者においてストレス気質と自己否定感との関連性が認められた。本研究により、大学生の喫煙行動の背後にある心理社会的要因として、自己イメージスクリプト概念による知見を得ることができた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

禁煙対策は、我が国の重要な健康対策である。全体的には年々喫煙者が減少してきているものの、青少年期からのタバコの喫煙者の禁煙支援が困難な状況にある。大半の喫煙者はニコチン依存症という薬物依存症であるが、他の薬物依存者と同様にその背後に自分は幸福になる価値がないなど罪障感や自己否定感や希死願望を伴う自己イメージの思い込み（スクリプト）の存在がある。本研究は、青年期の効果的な禁煙対策を探索するために、大学生の喫煙に関連する心理社会的要因を明らかにしようとするもので、本研究の結果、現在の喫煙行動の心理社会的要因として、従来からいわれている家族や家族以外の喫煙仲間の存在に加えて、遺伝的気質の関連や自己否定感の強さの関連を量的研究から明らかにした。

本研究に伴って明らかになった知見は、禁煙科学や思春期の保健に関連した専門雑誌の3つの原著論文に掲載され、専門分野での評価を得ているものと考える。

平成23年12月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。